

鹿児島県総合教育センター

平成30年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

じゃっど・すっど・きばっど 国分南中の新たな挑戦

—学校・家庭・地域の力を合わせた学力向上の研究—

霧島市立国分南中学校
教諭 前畑 あさよ

目 次

I 研究主題設定の理由	1
II 研究の構想	
1 研究のねらい	1
2 研究の仮設	1
3 研究の計画	2
III 研究の実際	
1 研究主題に関する基本的な考え方	
(1) 本研究の目指す学力向上	2
(2) 学力向上に向けてのアプローチ	
ア 研修係の役割	2
イ 校内テーマ研究の流れ	3
2 実態調査	
(1) 実態調査の概要	3
(2) 実態調査の結果と考察	
ア 学校内での取組に関する実態調査	3
イ 家庭と連携した取組に関する実態調査	4
ウ 地域と連携した取組に関する実態調査	5
エ 考察	5
(3) 四つの対応策	5
(4) 研究の方向性	5
3 学力向上を目指した取組	
(1) 学校内での取組	
ア 校内テーマ研究Ⅰ	6
イ 校内テーマ研究Ⅱ	9
ウ 校内テーマ研究Ⅲ	13
エ 校内テーマ研究Ⅳ	16
オ 相互授業参観	20
(2) 家庭と連携した取組	
ア 学力向上通信「じゃっど・すっど・きばっど」の発行	21
イ 授業と家庭学習とのつなぎ	22
ウ テスト訂正の保護者コメント	22
(3) 地域と連携した取組	
ア OBG（卒業生）講話の実施	22
イ 授業での地域素材の活用	23
IV 研究のまとめ	
1 研修係の取組のまとめ	24
2 研究の成果	
(1) 学校内での取組の結果	25
(2) 家庭・地域と連携した取組の結果	26
3 今後の課題	26
4 総括	27

I 研究主題設定の理由

次代を担う生徒たちに、これからの社会に対応できる確かな学力を身に付けさせることは、教師としての使命である。学校教育法や現行の学習指導要領では「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成」、「主体的に学習に取り組む態度の育成」を重視して教育活動に取り組むことが求められている。加えて、新学習指導要領では、グローバル化や情報化、技術革新などの時代の変化に通用する確かな学力を身に付けさせるために、「個性を生かした多様な人々との協働を促す」ことが示され、学校だけでなく家庭や地域など多様な人々との関わりの中で学力を育成することが期待されている。

このような時代の要請を受けて、本校では平成30年度から「主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力を高める指導の工夫～」という研究テーマで学力向上に焦点を当てた研究を行っている。平成29年度に生徒対象に実施した学期末の学校アンケートの結果を分析すると、「授業の内容の理解」や「目標を理解して授業に取り組んでいる（目標の自覚化）」などの学校（授業）に関する項目の平均値は高いが、「家庭での学習時間」や「読書時間」などの家庭学習に関する項目の平均値は低いことが分かった。また、標準学力検査（NRT）や鹿児島県学習定着度調査では、偏差値や通過率の値が大きく上昇した教科があり、その教科の授業のポイントを校内研究で共有することで授業改善につながるのではないかと考えた。しかし、保護者を対象に実施した学期末の学校アンケートの結果では、「授業の分かりやすさ」、「宿題の量」等の学校（授業）に関する項目や「家庭での学習時間」、「中学校卒業後の進路」等の家庭や地域に関する二つの項目が、他の項目より平均値が低いことも分かった。これらの結果を基に、全教科で統一した視点での授業改善を行うことや、家庭・地域との連携の在り方など、更に研修を深めることが必要だと感じた。

そこで、本研究では、まず、全教員で本校の学力向上に対する課題を共有し、教科等横断的な視点での共通目標を設定して授業改善に努めることで、教員同士がお互いのよさを認め合えるような体制をつくる。次に、確かな学力を育成するために生徒個人の考えを深めさせ、学び合いにつながるような「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行う。

さらに、家庭学習と学校をつなぐ取組を行ったり、地域の素材を活用した学習を取り入れたりすることで、学校と家庭と地域が連携していくことを提案していく。

これらのことから、じゃっど（認め合い）・すっど（深め合い・学び合い）・きばっど（連携）をキーワードに、学校・家庭・地域が力を合わせて学力向上を目指せるように本研究のテーマを設定した。

II 研究の構想

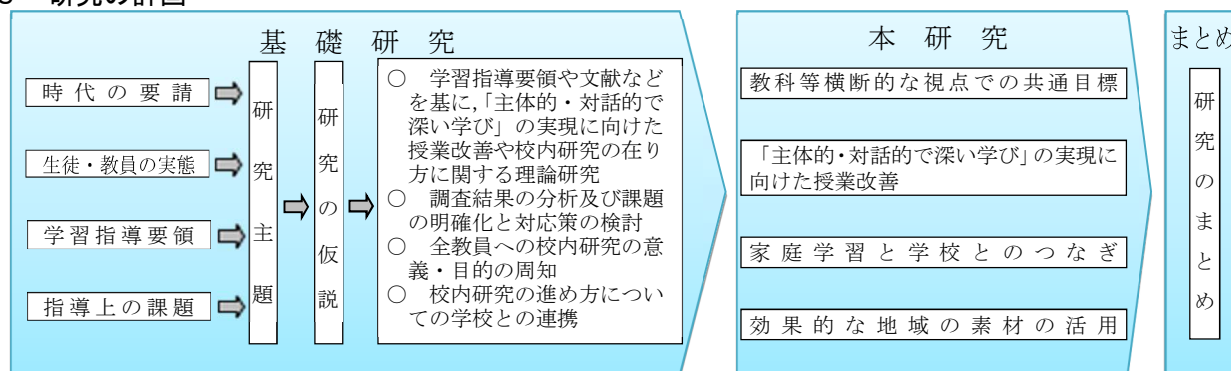
1 研究のねらい

- (1) 校内テーマ研究を実施し、全教員で共有できる教科等横断的な視点での共通目標を設定する。
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業づくりのポイントを取り入れたマニュアルである「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を作成し、授業づくり検討会や検証授業等で評価・検討・改善し、組織で学力向上に取り組める環境を整える。
- (3) 授業の振り返りの場面で家庭学習について計画を立てたり、学力向上通信「じゃっど・すっど・きばっど」を発行したりすることで学校と家庭をつなげる。
- (4) 地域の素材を活用した授業を通して、郷土愛を育成するだけでなく、学んだことを生活につなげる。

2 研究の仮説

教科等横断的な視点での共通目標の設定や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、家庭と連携した家庭学習、地域の素材を活用した授業を行えば、学校・家庭・地域が一体となり、学力向上に取り組む環境が整い、国分南中の学力向上につながるのではないかと。
--

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 本研究の目指す学力向上

平成19年6月に学校教育法の一部が改正され、これまでは明確に定義されていなかった学力の重要な要素が以下の三つであることが示された。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

また、新学習指導要領（平成29年告示）においても、学校教育法で示された学力の重要な要素を引き継ぎながら、次のように示されている。

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮すること。

ここで、共通する学力に重要な要素は以下の三つである。

- 1 基礎的（基本的）な知識及び技能
- 2 思考力、判断力、表現力等
- 3 主体的に学習に取り組む態度

本研究においても、この三つの要素を学力として捉えることにした。それらが高度情報化やライフスタイルの多様化など、変化が激しく予測が困難な時代の中でも通用するものになるように、以下の二点を意識して研究を進めることで、学力向上を目指していくことにした。

- ・ 学習の基盤や学習習慣が確立できるように、教科の特性を尊重しながらも教科の枠を超えて全教員で取り組むための環境を整えること
- ・ 学力の三つの重要な要素を育成できるように、多様な人々との協働を促しながら学校だけではなく家庭や地域と一体となって取り組むための環境を整えること

(2) 学力向上に向けてのアプローチ

ア 研修系の役割

学校・家庭・地域が力を合わせて学力向上へ向けての取組を進めるためには、学力向上についての具体策を全教員で共通理解する場である校内テーマ研究の企画・検討や実施、更に外部機関（学びの組織活性化推進プロジェクト*1）との連携が大切であり、本校では、これらを推進する役割を研修係が担っている。そこで、長期研修中であつたが、研修係の一員として校務分掌に位置付けてもらうことにした。

* 1) 教育事務所単位で、学力向上のための実践校（小学校1校、中学校1校）を指定して、校内研修づくりの支援を行い学力向上担当教員を中核とした学力向上推進体制を整備するとともに、市町村にモデル校（中学校1校）を指定して、学校全体の授業づくりの支援を行うことで、組織的かつ総合的な学力向上に向けた取組を展開して学校でのPDCAサイクルを確立し、県下への普及を図る。

研修係の役割（図1）は大きく四つあり、第一は校内研究の組織形成である。管理職への相談や報告を行いながら、研修係会や指導案づくり検討会を実施し、討議内容や検証授業に関する共通理解を図る。第二に、学力向上に関する校内研究を企画し実施することである。研修係会や指導案づくり検討会での話し合いを基に校内テーマ研究などを進めていく。第三に、外部機関との連携を図ることである。学びの組織活性化推進プロジェクト等をどのように活用して組織的に学力向上に取り組めるかを検討する。第四に、校内研究の質的改善を推進することである。校内テーマ研究後の教員用振り返りシートの分析を行い、教員・家庭へ取組の実態を発信し、校内テーマ研究の質の向上を目指す。

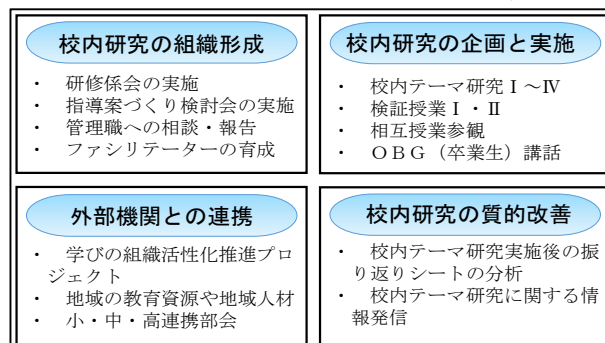


図1 研修係の役割

イ 校内テーマ研究の流れ

研修係として大切なことは、一年間の見通しをもって校内テーマ研究を実施することである。

そこで、本年度の校内テーマ研究の流れを図2のように考えた。最初に、本校の実態を把握するためのアンケートを実施し課題の分析（research）を行う。第二に、研修係会や授業づくり検討会で計画（plan）を立てる。第三に校内テーマ研究、検証授業、相互授業参観、OBG（卒業生）講話を実施したり、学力向上通信を発行したりする（do）。第四に、実施したことの振り返り（check）を行う。最後に、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を改善（action）し、学力向上にR-PDCAサイクルでつなげていく。

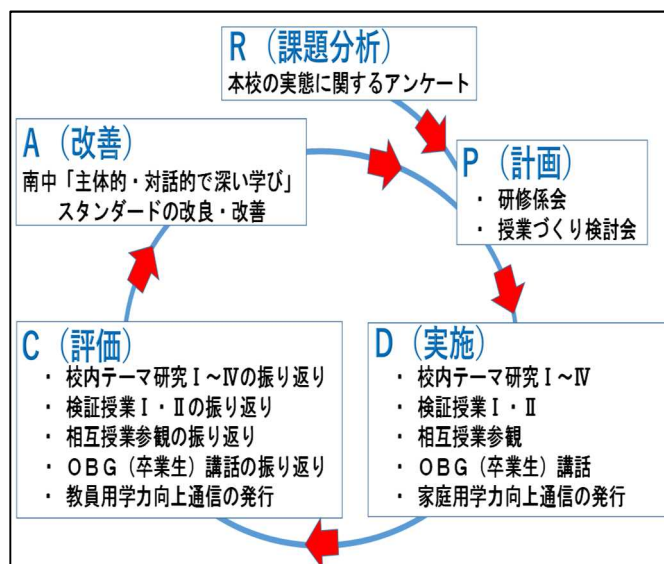


図2 学力向上に向けた校内テーマ研究の流れ

2 実態調査

(1) 実態調査の概要

調査目的	研究主題に関する教員の意識等を調査することで、校内テーマ研究のグループ討議に必要な項目を把握し、今後の研究の基礎資料とする。
実施期間	平成30年5月21日（月）～6月22日（金）
調査対象	霧島市立国分南中学校教員26人
調査方法	質問紙法

(2) 実態調査の結果と考察

ア 学校内での取組に関する実態調査

学力向上を目指し全教員で組織的に研究を進めるには、まずは、校内テーマ研究に対する教員の意識や家庭学習、地域との連携の実態を把握する必要があると考え、教員への実態調査を行った。

「学力向上に対する学校の課題を教員

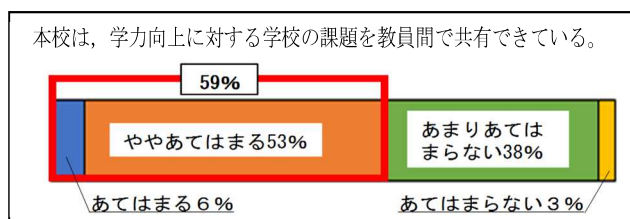


図3 教員の実態調査（課題の共有化）

間で共有できている」と回答した教員が59%という結果（p. 3 図3）であり「教科の枠を超えた学力向上に対する共通な目標をもって研究を進めている」と回答した教員も59%という結果（図4）であった。また、検証授業や学力向上プログラムの研究授業の「指導案づくりを共同で検討している」という教員は9%で非常に低く（図5）、「お互いの授業を自由に参観し意見交換ができています」という教員も27%という低い実態（図6）が明らかになった。さらに、「ペア・グループ活動等の場면을授業に効果的に取り入れることができる」と答えた教員は72%という結果（図7）であった。しかし、図7のペア・グループ活動は、昨年度の校内テーマ研究での共通実践事項であったにもかかわらず「学級活動や生徒会活動等でのグループ活動が主であって、各教科の授業でペア・グループ活動を効果的に取り入れていない現状がある。」という意見も出されていた。

課題として、まずは全教員で学力向上に関する本校の課題や目標を共有し、学力向上への取組を個々のものではなく、学校全体での組織的な取組へと変えていかなければならない。そうすることで、指導案づくりが共同で行われ、お互いに授業参観や意見交換がしやすくなり、教員の授業力の向上が図れると考える。また、ペア・グループ活動についても、その良さや意義を全員で共有し、全教科で共通実践事項として取り入れて、対話的な学習を目指す必要がある。

イ 家庭と連携した取組に関する実態調査
霧島市では小中連携の取組の一環として家庭学習60・90運動を実施している。そこで、本校では各学期の定期テスト前に家庭学習の時間や内容を点検し、集計・掲示を行っている。「家庭学習の点検は学力向上に役立っている」と回答した教員は64%という結果（図8）であった。また、「生活の記録を授業と家庭をつなぐ役割として活用している」と回答した教員は66%という結果（図9）であった。

本校は、教科の枠を超えた学力向上に対する共通な目標をもって研究を進めている。

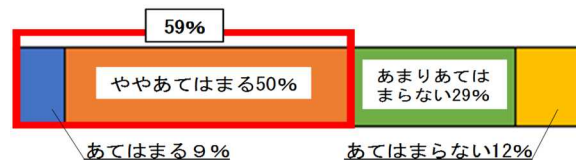


図4 教員の実態調査（共通目標）

本校は、指導案づくりを共同で検討している。

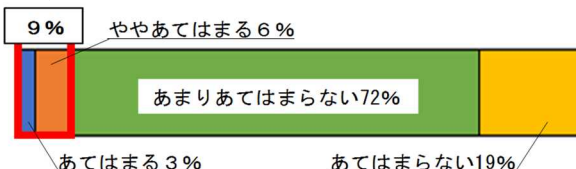


図5 教員の実態調査（指導案づくり）

本校は、お互いの授業を自由に参観し意見交換ができています。

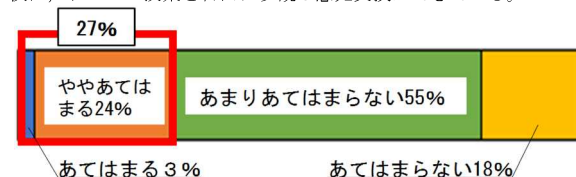


図6 教員の実態調査（相互授業参観）

私は、ペア・グループ活動等の場면을授業に効果的に取り入れることができる。

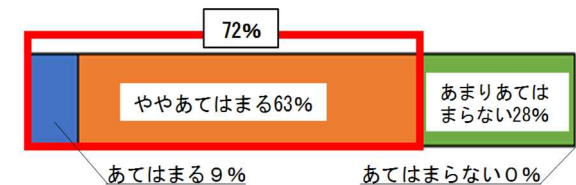


図7 教員の実態調査（ペア・グループ活動）

本校の家庭学習の点検は学力向上に役立っている。

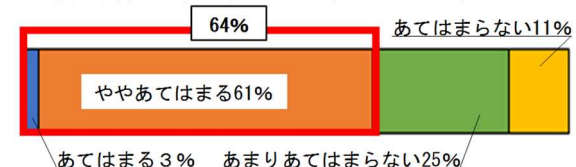


図8 教員の実態調査（家庭学習点検）

私は、生活の記録を授業と家庭をつなぐ役割として活用している。



図9 教員の実態調査（家庭学習）

O B G（卒業生）講話は、生徒の学力向上に役立っている。

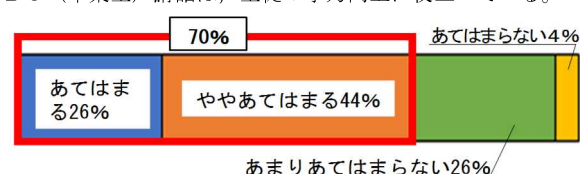


図10 教員の実態調査（O B G講話）

具体的には、日々の教師と生徒の生活の記録での交流の中で、学習に関する励ましや助言等を行ったり、家庭学習の時間や内容を教員が把握したりしている。

課題として、家庭学習の点検や生活の記録を学力向上に対する取組となるように工夫する必要がある。また、生活の記録を家庭学習と授業をつなぐものとして活用する工夫が必要である。

ウ 地域と連携した取組に関する実態調査

第3学年の7月に実施しているOBG（卒業生）講話について「生徒の学力向上に役立っている」と回答した教員は70%という結果（図10）であった。しかし、昨年度までのOBG講話は、高校進学という意味での進路指導の話が主であって、生徒に学ぶことの意義や目的、そして、生涯にわたって学び続けることの大切さを理解させることができていなかった。また、講話の内容を自分の人生や社会生活と結び付けて深く理解させるような手立てを入れることはできていなかった。

課題として、OBG講話を通して生徒に学ぶことの意義を理解させ、学力向上をもっと意識させる工夫が必要である。また、OBG講話だけでなく、更に日頃の授業の中においても学習課題や教材に地域の素材を積極的に取り入れる必要がある。

エ 考察

実態調査の結果から、学校全体で組織として学力向上を目指す環境を整えることや、分かりやすい授業を目指して授業改善を行うこと、各家庭に学力向上に対する意識をもたせ、家庭学習を充実させるための工夫を行うこと、地域の素材を使ってより社会で通用する力を身に付けさせることが課題として考えられる。

(3) 四つの対応策

実態調査の結果から分かった四つの課題を解決するために図11のような対応策を考えた。第一に、学校全体が組織として学力向上を目指す環境を整えるために、教科等横断的な視点での共通目標の設定を行う。第二に、分かりやすい授業を行うために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行う。第三に、家庭に学力向上に対する意識をもたせ、家庭学習を充実させるために学校と家庭学習とのつなぎの工夫を行う。第四に、将来について社会で通用する力を身に付けさせるために地域の素材を効果的に活用する。ただし、この四つの対応策は、全教員で組織的に推進していくことが前提である。

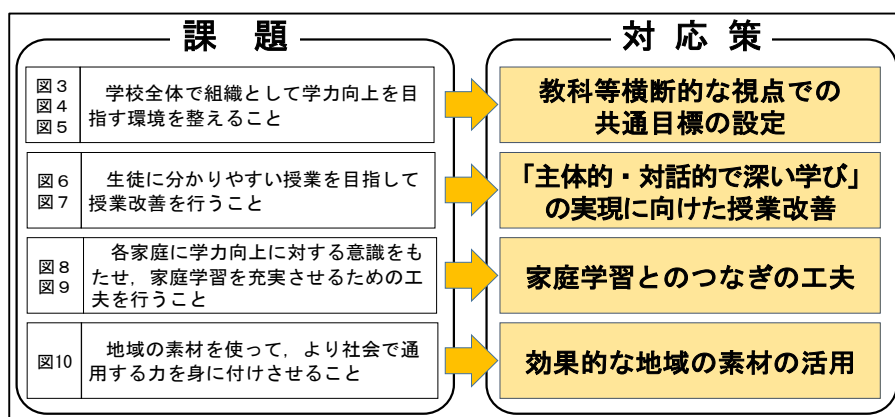


図11 課題を基にした学力向上に向けた四つの対応策

(4) 研究の方向性

課題に対する学力向上に向けた四つの対応策（図11）を「学校内での取組」、「家庭と連携しての取組」、「地域と連携しての取組」の三つに分類して本年度の研究の方向性を図12にまとめた。

学校内での取組は、校内テーマ研究の中で本校の課題を共有し、教科等横断的な視点での共通目標を設定する。研修係会や授業づくり検討会、相互授業参観を設定することで、授業づくりを共同で行い、お互いの授業力の向上を目指す。そして、昨年度からの取組であったペア・グループ活動を取り入れて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行う。

家庭と連携しての取組は、校内テーマ研究などの様子を学力向上通信に掲載し各家庭や全教員に配布することで、保護者に学校の研究や取組への理解と協力を図る。また、授業の最後に家庭学習の課題を生徒自身が決めることで、家庭学習を有意義なものにする。さらに、テストの訂正

に保護者がコメントを記入することで、保護者と生徒が共に学力向上に取り組む体制を整える。

地域と連携しての取組は、学習課題や教材に地域の素材を活用することで郷土愛を育み、生徒の学習に対する興味や関心を高める。また、OBG（卒業生）講話で学力向上に関する内容を取り扱い、学力向上を目指す。

これらが学校・家庭・地域が力を合わせて取り組む学力向上の研究の方向性である（図12）。

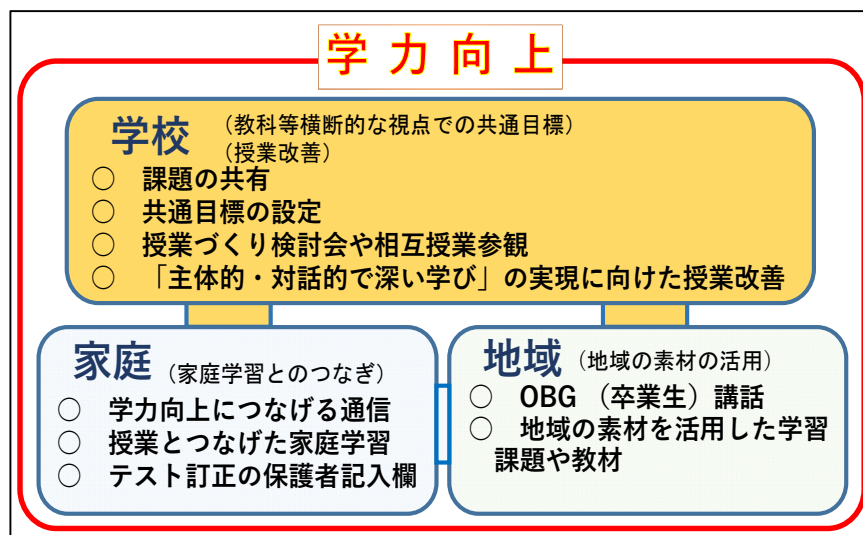


図12 研究の方向性

3 学力向上を目指した取組

(1) 学校内での取組

学校内での取組については、図12の四つである。実際の学校での取組は、校内テーマ研究Ⅰで学校の課題の共有と共通目標の設定、そして、校内テーマ研究Ⅱ～Ⅳで実際の授業づくりや授業改善に関する取組を行った。

ア 校内テーマ研究Ⅰ

(ア) 校内テーマ研究Ⅰに向けた研修係会

4月の始めに研究主題や内容の確認を行った。そして、校内テーマ研究の予備調査となるアンケートを実施した。校内テーマ研究Ⅰの事前に行った研修係会では、校内テーマ研究Ⅰの当日の内容の確認を行い、グループ討議の進行の方法や討議内容を共通理解した。

また、前日までに全教員へ下記の事前資料を配布し、研究討議がスムーズに進むように研修係が説明を行った。

【校内テーマ研究Ⅰに向けての事前配布資料】

テーマ研究Ⅰの研究討議を行うための資料 H30.5.25 国分南中学校研修係

1 討議の内容と視点

(1) 本校の課題の共有化

視点① 事前のアンケート結果から選ばれた学力向上に特に必要だと考えられる項目について、ワークシートと付箋を使用し、各班にて本校の実態や課題を討議します。そして、改善できそうな取組を一つに絞り込みます。

(2) 共通目標の設定

視点② 各班から出された改善できそうな取組の中から、更に教科の枠を超えて全員のできる取組を選択し、全教科での共通目標を設定します。

2 プレゼン資料の内容

① 時代の変化 知識基盤社会、情報化やグローバル化といった社会変化、人工知能の急速な発達

② 本校の生徒に身に付けさせたい学力 変化が激しく将来の予測が困難な時代であっても、自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していくことができる確かな学力

③ アンケート結果 国分南中の現状を考えて学力向上のために特に必要だと考えている取組の発表



(イ) 校内テーマ研究Ⅰの実際（5月29日（火））

a 校内テーマ研究Ⅰの目標

教科等横断的な視点での共通目標の設定

b グループ討議の視点

視点① 本校の実態や課題を討議し、学力向上に向けて改善できそうな取組を各班で一つに絞る。

視点② 各班から出された改善できそうな取組の中から、更に教科の枠を超えて全員でできる取組を選択し、教科等横断的な視点での共通目標を設定する。

c 校内テーマ研究Ⅰの実際

研究の方向性(図12)で示したとおり、本校の学力向上に関する取組の課題を共有し、教科の枠を超えて取り組むことができる共通目標を設定することが大切である。校内テーマ研究では、このねらいを達成するために、アンケートから本校の教員が本校の学力向上に必要なだと意識している取組を選択して付箋に記した。その付箋と生徒と教師に関する2次元表を使用してグループ討議で課題の共有化を図った。そして、教員の意識を変えたり、方法を工夫したりすることで、教科の枠を超えて全教員で取り組めそうな共通目標の設定へとつなげた。最後に、学びの組織活性化推進プロジェクトの先生から今後の研究の進め方について指導助言をいただいた。

進め方	具体的な働き掛け
1 講師紹介 2 研究の意義・目的の説明 3 本時の内容や進め方、付箋の使い方、時間配分などについて確認	○ 学力向上に関するプレゼンを行う。 ○ アンケートの結果を発表する。 ○ 内容は、付箋と2次元表を使い、ワークショップ型で学校の課題について討議し、教科の枠を超えた共通目標を設定することである。 ○ 討議の視点の説明をする。 ○ 進め方は、研修係を各グループのファシリテーターとし、グループ討議の時間は15分とする。発表者は各班で決め、1分以内で発表をする。 ○ 付箋の内容については、本校が現在取り組んでいる学力向上に関する取組の中から、事前アンケートで先生方が特に必要だと考えている項目を抽出している。
4 視点①のグループ討議 5 発表 6 視点②のグループ討議	○ 本校の実態や課題を討議し、学力向上に向けて改善できそうな取組を一つに絞る。 ○ 書画カメラとタイムキーパーを使用する。 ○ 教科の枠を超えて全教員で気持ちを一つにして生徒の学力向上に向けての取組が実施できるような共通目標を討議する。

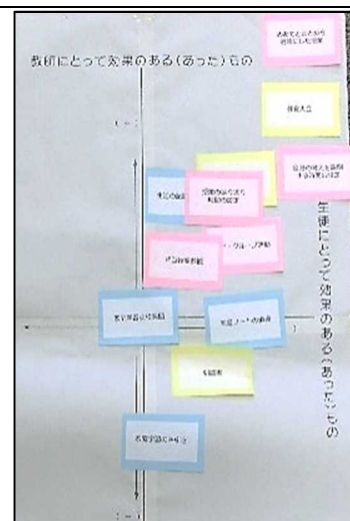


写真1 付箋と2次元表を使ったグループ討議

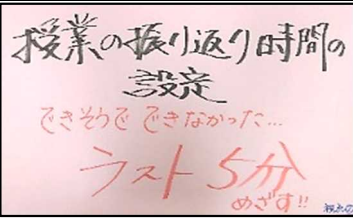
7 焦点化された共通目標と今後の授業とのつなぎ	○ 視点②の各グループの発表をまとめる。 ○ 教科等横断的な視点での共通目標を完成する。	
8 振り返り時間	○ 決定した共通目標を次回の校内テーマ研究Ⅱの検証授業（英語）で取り入れることを伝える。 ○ 日頃の授業において全教員で実施する。	

写真 2 班で発表された共通目標

d 教科等横断的な視点での共通目標

グループ討議において各班から出された共通目標を図13のようにまとめ、授業中にいつでも確認できるようにA5サイズで印刷し、ラミネートしたものを全教員に配布した。

平成30年度 国分南中学校職員テーマ研究Ⅰ

《共通目標》

- **授業の振り返り時間の設定**
- **ペア・グループ活動の活用**
- **家庭学習の充実**

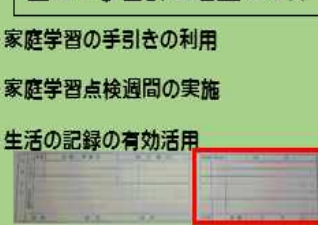
授業の振り返り時間の設定 ☆始めの1分、終わりの3分 目に見える振り返り ラスト3分を確保しよう☆ ・始めの1分…前時の内容 ・終わりの3分…本時の内容 『授業で分かったこと』と 『家で勉強したいこと』を ノートに書かせよう！ 友達に伝えさせよう！	ペア・グループ活動の活用 ☆マニュアルの活用☆  ☆全員参加☆ ・全教科で実施できる学習班 ・リーダー育成と助け合いの関係づくり ・対話的な学びの実施	家庭学習の充実 ☆テスト前に 家庭学習の手引きを横に 置いて学習計画を立てる☆ ・家庭学習の手引きの利用 ・家庭学習点検週間の実施 ・生活の記録の有効活用  授業の振り返りを宅習にさせよう！ ・授業の振り返りと宅習指導
---	---	--

図 13 教科等横断的な視点での共通目標

e 振り返りシートの結果（図 14）

校内テーマ研究Ⅰ終了後に教員への振り返りシートの記入を実施した。今回は、87%の教員が「グループ討議で自分の意見が言いやすい。」、また「自分の意見が反映された。」という結果が得られた。さらに、全教員が「テーマ研究の内容が分かった。」と答えていた。

しかし一方で「グループ討議の時間が適当だった。」という感想をもった教員は74%であり、「グループ討議の時間をもう少し増やしてほしい。」という感想があった。

課題として、校内研究の時間は限られているので、グループ討議の時間を増やすことは難しいため、討議の方法と時間配分を工夫する必要がある。

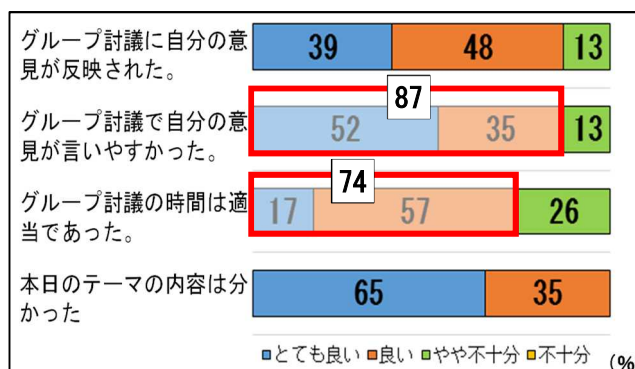


図 14 校内テーマ研究Ⅰの教員用振り返りシートの結果

f 学びの組織活性化推進プロジェクトとの事後検討会

校内テーマ研究Ⅰ終了後に、学びの組織活性化プロジェクトの先生方と管理職、研修係で、当日の反省と次回の校内テーマ研究の打合せを行った。プロジェクトの先生方から本校教員の活発なグループ討議の姿に高評価をいただいた。次回の校内テーマ研究Ⅱでは、英語の検証授業と授業研究を実施し、本校の研究テーマである「主体的・対話的で深い学び」の実現について討議することを確認した。



写真3 学びの組織活性化推進プロジェクトとの事後検討会

(ウ) 考察

校内テーマ研究Ⅰに向けて研修係会を実施するに当たり、事前に資料配布と説明等を行ったため、スムーズに校内テーマ研究Ⅰを進めることができた。本校の目指す学力が、テストの成績だけではなく、生徒自身が将来を切り拓くことができる力であることについて共通理解を図ることができた。また、これまで行ってきた本校の取組を学力向上の視点で再検討したことで、グループ討議が活発に行われ、本校の課題の共有化と教科等横断的な視点での共通目標の設定ができた。次回は、決定した共通目標を取り入れた授業を提供し、研究主題である「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す。そして校内テーマ研究Ⅱにおいても、全ての教員が主役となれるように、より討議しやすい課題や手法を工夫していく必要があると考えた。

イ 校内テーマ研究Ⅱ

(ア) 授業づくり検討会と校内テーマ研究Ⅱに向けての研修係会

p. 6の図12で示した「学校内での取組」である課題の共有と共通目標の設定は、校内テーマ研究Ⅰでおおむね達成できた。そこで校内テーマ研究Ⅱは、共通目標を取り入れた授業を実施し、検証する中で「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業について討議することにした。検証授業は英語科が実施し、学級活動で取り扱った地域の職業と関連付けた課題を設定した。



写真4 指導案づくり検討会

さらに、生徒の学びの姿を見取るために各グループで観察班を決め、映像と付箋を利用して生徒を観察する方法を工夫した。指導案は、授業づくり検討会を実施し、授業者と研修係が共同で作成した。

授業研究を兼ねる校内テーマ研究Ⅱは、まずは、校内テーマ研究Ⅰで作成した共通目標を取り入れることとした。次に、共通目標の中の「振り返り」、「ペア・グループ活動」などを取り入れることによって、生徒の「主体的・対話的で深い学び」が実現できたのかを見取れるように、理想とする学びの姿を「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」としてまとめていくことにした。「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」とは、共通目標の項目や教材・教具の工夫、発問の工夫などの教師の働き掛けによって、生徒の理想とする学びの姿をまとめたものである。

【校内テーマ研究Ⅱに向けての事前配布資料】

テーマ研究Ⅰの研究討議を行うための資料

H30. 7. 2

国分南中学校研修係

1 検証授業Ⅰについて

(1) 日時・内容

- ・ 5校時2年生の英語（一斉授業）
- ・ 内容…Presentation①将来の夢

(2) 授業設計について

7月6日（金）の研修は、英語の検証授業とテーマ研究で共通目標の検証と南中スタンダードの作成を行います。



- 教科等横断的な視点での共通目標の検証 - ア 授業のスタート1分と終わりの3分の振り返りの時間の確保 - イ グループ活動の効果的な活用 - ウ 家庭学習とのつなぎ - 地域素材の活用 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善
(3) グループ活動について
3名か4名での班活動
検証授業Ⅰの参観について
(1) 参観の方法
- その単元において個に応じた変容を見取るために意図して設定した班（生徒）を観察する。 - タブレットによる生徒の動画撮影と付箋のメモを行う。 - 国語，社会，数学，理科，英語，保健養教，音美技家の7班に分ける。
(2) 参観の視点
視点① 授業者の行動や働き掛けが，個々の生徒の学びに合ったものであるかどうか。
視点② 授業者の行動や働き掛けによって，どこで学びが成立し，どこで学びの質が高まったか。
3 校内テーマ研究Ⅱ（授業研究を含む）について
(1) 討議の目的
生徒の学びに対する姿や反応を分析・討議し，「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の作成
(2) 討議の内容
内容① 検証授業の分析を通し，共通目標を授業に取り入れていたか，また，「主体的・対話的で深い学び」がどこで成立していたかを生徒の学びの姿から見取る。
内容② 「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を作成する。

【検証授業Ⅰ（英語）の指導案】

過程	時間	形態	研究の視点	主な学習活動	指導上の留意点
導入	3分	ペア	リピート・ラーニング ペア活動	1 パターン・プラクティスTIME	○ ペアで協力して，不定詞を使った文をカードで復習させ，既習事項の定着を図る。
	7分	個	振り返り時間の設定 地域素材の活用 他教科との連携の学び ※主体的な学び	2 前時で学習した霧島市にちなんだ職業を使った日本語のモデル文を英語にする。	○ 本時で使用する職業の確認をする。 黒酢職人・縄文土器発掘調査委員・自衛官・霧島九面太鼓・ホテルスタッフ・カーデザイナー・精密機械製造スタッフ・茶生産者・空港の管制官
展開	2分	一斉		3 本時の学習課題を確認する。	
	5分	グループ	ペア・グループ活動 ※対話的な学び	相手に分かりやすく伝えるスピーチ原稿を書くには，どのような工夫が必要だろうか。 4 モデル文からスピーチ文にするための見通しを考える。	○ モデル文をこれまで学習した語句や文法を工夫して使い，読み手に分かりやすいスピーチ原稿を書くためには，どのようにすればよい考えさせる。 【生徒の予想される反応】 - 日本語のスピーチ原稿を考える。 - 文と文を何かの単語でつなぐ。 - 理由を説明する文章を増やす。

検証のポイントである共通目標「主体的・対話的で深い学び」や地域素材について記してある。

展開	15分	グループ	グループ活動 ※対話的な学び ※深い学び	5 グループでスピーチ原稿を工夫して作成する。	○ 教科書や辞書を話し合いに使用してもよいことを伝える。 ○ 使われている不定詞の表現や基本文型、単語の綴りなどが適切に確認させる。 ○ 机間指導で読み手が分かりやすい文章になっているか考えさせる。 ○ 活動がスムーズにできているグループには、より発展的な内容になるように促す。 ○ 工夫した点については、発表用シートにまとめさせる。
終末	12分 6分	グループ 個別	グループ活動 ※深い学び 振り返り時間の設定 家庭学習との連携	6 工夫点の説明を加え、スピーチ原稿を発表する。 7 本時の学習のまとめと家庭学習の確認をする。 8 次時予告をする。	○ 他のグループの発表からよりよい文章表現を学ばせる。 ○ 授業と家庭学習をつなぐ。 ○ 次時の学習意欲を高めさせる。

検証のポイントである共通目標、「主体的・対話的で深い学び」や地域素材について記してある。

(イ) 校内テーマ研究Ⅱの実際（7月6日（金））

a 校内テーマ研究Ⅱの目標

英語の検証授業を基にした「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の作成

b グループ討議の視点

- 視点①** 英語の検証授業を基にした共通目標の検証をする。
- 他教科等と連携した地域の素材を活用した題材の利用
 - ペア・グループ活動と振り返り時間の設定
 - 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた生徒の学びの姿の見取り
- 視点②** 全教科で取り組める「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を作成する。

c 校内テーマ研究Ⅱの実際

教員はグループに分かれ生徒を観察し、生徒の学びの姿を付箋に書いた。研究討議ではその付箋を使い、授業中の様々な生徒の学びの姿を出し合い、共通目標の検証と「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」について分析を行った。グループ討議で出された生徒の学びの姿を基に「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を作成する計画であった。しかし、これまで授業の中から理想とする生徒の学びの姿を具体的に表す校内研究を実施したことがなかったため、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」にまとめることは困難であった。最後に、学びの組織活性化推進プロジェクトの先生の指導助言から、授業参観の方法に改善が必要であることや、生徒の学びの姿の見取り方に工夫する余地があることを教えていただいた。



写真5 観察班を決めた授業参観

進め方	具体的な働き掛け
1 講師紹介 2 検証授業の目的と討議のゴールについての説明	○ 検証授業Ⅰは、前回の研究で決定した教科等横断的な視点での共通目標を取り入れ、学習課題に地域の素材を活用し、本校の研究主題である『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した検証授業である。

	○ 討議のゴールは、検証授業で生徒の学びの姿から、自分自身の授業改善の方法を探ることである。 ○ 本日の討議で出された意見が、次の検証授業に生かされていくものとなる。(R-PDCAサイクル)
3 授業者の主張点や討議についての説明	○ 学級活動の進路学習(職業マップの学習)と関連させた授業であった。 ○ 霧島市の職業九つを使用した(地域の素材の活用)。 ○ 初めの1分と終わりの3分の振り返り時間を取り入れた。 ○ 終わりの3分の中で家庭学習を意識させた。 ○ 「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を意識して計画した。特に、「深い学び」についてはモデル文からスピーチ文に適切な接続詞や文法を他者と比較・検討し練り合うことでつながると考えた。
4 教科班によるグループ討議	○ ファシリテーターと発表者を各班で決める。 ○ 個々で準備した付箋を時系列に拡大指導案に貼っていく。 ○ 付箋の内容を基に、授業者の授業改善の視点①について検証を行う。
5 自分の教科でも同様に見取れる理想の学びの姿の発表	○ 生徒の学びの姿から「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」についてスタンダードをまとめる。 ○ 書画カメラとワークシートで、各教科で話し合った「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を発表する。
6 各学びの姿の焦点化	○ 発表された理想の学びの姿をまとめ、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を決める。

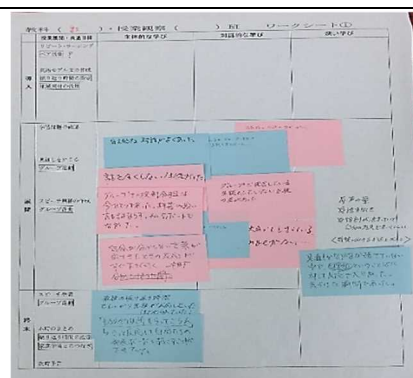


写真6 拡大指導案を使った授業分析

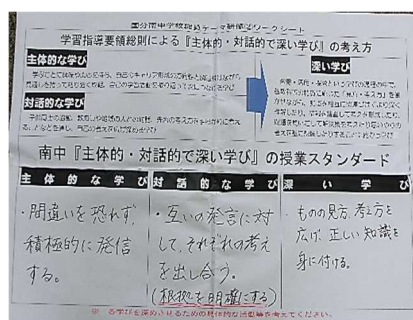


写真7 班で作成したスタンダード

d 振り返りシートの結果

振り返りシートの感想に、「授業のゴールやグループ討議のゴールが分かりにくかった。」、「生徒の学びの姿を見取ることは難しい。」、「実践に生かしづらく実りある討議だとは言えない。」などの厳しい意見があった。このような感想を裏付ける結果が図15にも表れていた。特に、「グループ討議の時間」を適当であると答えた教員は48%で、半数にも満たなかった。また、「本日のテーマ研究の内容が分かったか。」という質問も58%という結果であり、今回の校内テーマ研究に課題がたくさんあることが読み取れる。

原因として、第一に生徒の学びの姿を見取る校内研究を今までに行えていたのか、第二

に限られた討議時間の中で活発に討議を進められるような企画だったのか、という二点が明らかになった。

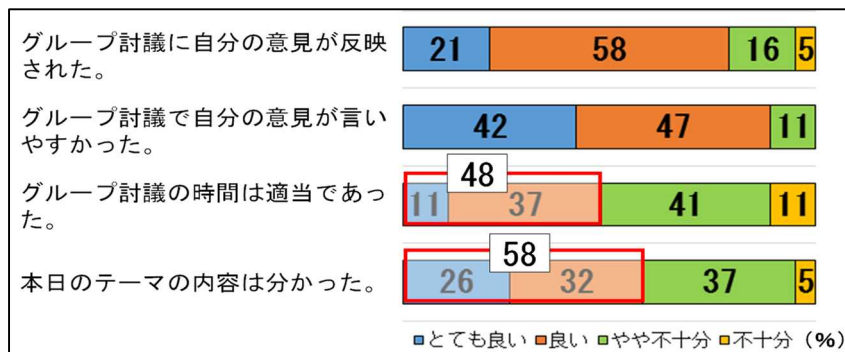


図 15 テーマ研究Ⅱの教員用振り返りシートの結果

e. 学びの組織活性化推進プロジェクトとの事後検討会

「主体的・対話的で深い学び」の主体は生徒であり、生徒の学びの姿から授業を検証していく予定であった。生徒は、学習に前向きに取り組んでいたが、多くの教員が参観するだけでも生徒にとって多くのストレスを与えることになった。学びの組織活性化推進プロジェクトの先生方から、生徒の学びの姿を見取るためには、生徒の後方から参観をするのではなく、表情がよく見えるところから参観する必要があるとの助言をいただいた。今回は、生徒の学びの姿を見取る時間が不足し、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」をまとめられなかったため、次回の校内テーマ研究Ⅲにて再度、映像から生徒の学びの姿を討議し、スタンダードの完成を目指すこととなった。

(ウ) 考察

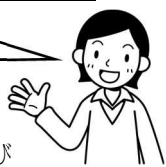
テーマ研究Ⅱを実施して、生徒の学びの姿を見取ることの難しさを痛感した。私たち教員は、つい授業者の言動を観察してしまうが、大切なことは、授業を通して生徒の学びの姿がどのように変容したかである。今後も、生徒の学びの姿を見取ることができなければ「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の完成は難しい。これらの反省を念頭に、校内テーマ研究Ⅲは生徒の学びの姿を見取る演習を行った後、授業の生徒の姿をVTRで再度分析し、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を完成させることを決めた。

ウ 校内テーマ研究Ⅲ

(ア) 校内テーマ研究Ⅲに向けての研修係会

校内テーマ研究Ⅲは、校内テーマ研究Ⅱで時間が不足した「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の完成を目標とした。第一部で、生徒の学びの姿を見取る演習を行い、その後に検証授業Ⅰの映像から生徒の学びの姿を見取り、自分の授業で出会いたい生徒（理想とする生徒の学びの姿）について考えた。第二部では、個の意見を教科ごとのグループで討議することで、それぞれの教科の授業で出会いたい生徒（理想とする生徒の学び）の姿をまとめ、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の完成を目指すことを決めた。そして、前日までに資料の配布を行い説明した。

【校内テーマ研究Ⅲに向けての事前配布資料】

テーマ研究Ⅲの研究討議を行うための資料		H30. 7. 30	国分南中学校研修係								
1	討議の内容 <u>第一部…生徒の学びを見付ける教師力</u> 前回の検証授業（英語）の映像を分析し、生徒の学びのきっかけ（どうしてその学びが成立したのかの理由）を討議し、自分の授業で出会いたい生徒の姿を考える。 <u>第二部…授業力を高めるための工夫</u> 各教科の授業で出会いたい生徒の姿を考え、そのような生徒と出会うための授業の工夫を討議する。	8月1日（水）のテーマ研究Ⅲは、検証授業（英語）の映像を基に生徒の姿から「生徒の学び」を見付け、二学期に向けての授業力を高める研修を行います。 									
2	班編成 <table border="1"> <tr> <td>1 班・・・英語</td> <td>2 班・・・国語</td> <td>3 班・・・数学</td> <td>4 班・・・保体、養護教諭</td> </tr> <tr> <td>5 班・・・理科</td> <td>6 班・・・社会</td> <td>7 班・・・音楽、美術、技術・家庭</td> <td></td> </tr> </table>	1 班・・・英語	2 班・・・国語	3 班・・・数学	4 班・・・保体、養護教諭	5 班・・・理科	6 班・・・社会	7 班・・・音楽、美術、技術・家庭			
1 班・・・英語	2 班・・・国語	3 班・・・数学	4 班・・・保体、養護教諭								
5 班・・・理科	6 班・・・社会	7 班・・・音楽、美術、技術・家庭									

(イ) 校内テーマ研究Ⅲの実際（８月１日（水））

a 校内テーマ研究Ⅲの目標

「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の作成

b グループ討議の視点

視点①	検証授業の映像を基に，生徒の学びのきっかけを討議する。
視点②	各教科の授業で出会いたい（理想とする）生徒と出会うための授業の工夫を討議する。

c 校内テーマ研究Ⅲの実際

校内テーマ研究Ⅲは，第一部と第二部に分けて討議を行った。第一部は，検証授業の導入・展開・終末の各２分間の映像からどのような生徒の学びが見取れるかをグループ討議し，自分の授業で出会いたい（理想とする）生徒の学びの姿を考えた。第二部では，教科の授業で出会いたい（理想とする）生徒に出会うための工夫についてグループ討議を行い，生徒の学びの姿を「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」としてまとめた。

【第一部 生徒の学びの姿の見取り方についての討議】	
進め方	具体的な働き掛け
1 前回の研究の振り返り	○ テーマ研究Ⅱで振り返る。
2 研究の進め方についての説明	○ 第一部と第二部とに分ける。
3 映像を基にして，生徒にどのような学びが成立しているかの検証	○ 討議の視点の説明を行う。
4 授業者による説明	○ 導入部分の映像を使って，どのような生徒の学びが成立していたと見取れるかについて説明する。
5 個の考察の時間の設定	○ 展開・終末部分の映像から討議する。
	○ 授業者が生徒の学びと要因について説明を行う。
	○ 自分の授業で出会いたい生徒の姿を考える。
【第二部 理想とする生徒に出会うための授業の工夫についての討議】	
進め方	具体的な働き掛け
6 生徒の姿から授業の工夫を討議	○ 各教科にて理想とする生徒の姿（一つか二つ）を絞り，その生徒の姿に出会うための授業の工夫について討議する。
7 各教科の発表	○ ファシリテーターは教科主任，発表者は自由。
	○ 討議した内容について発表する。
8 「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の作成	○ 各教科で出された授業の工夫が「主体的な学び」，「対話的な学び」，「深い学び」のどれに分類するかを整理して発表する。
9 本時のまとめ	○ 理想とする生徒に出会うために，本日までの研修で討議してきた教科の枠を超えた共通目標や南中スタンダードを実践していくことを伝える。
	○ 本日の振り返りシートを実施する。

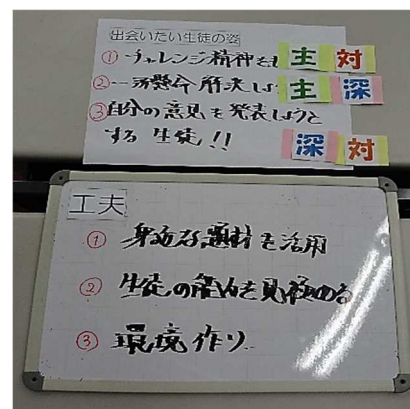


写真8 グループ討議の結果

d 南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード

第二部のグループ討議で発表された生徒の学びの姿を図16のようにまとめ、p. 8の図13の共通目標と両面印刷してA5サイズにラミネートして配布した。この「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」は、具体的な生徒の学びの姿から授業改善ができるようにまとめたものである。今年度、三点の共通目標（振り返り、ペア・グループ学習、家庭学習の充実）を取り入れた。この目標を取り入れることで、生徒の学びがどう変わったのかを南中スタンダードとしてまとめ、案を作成した。

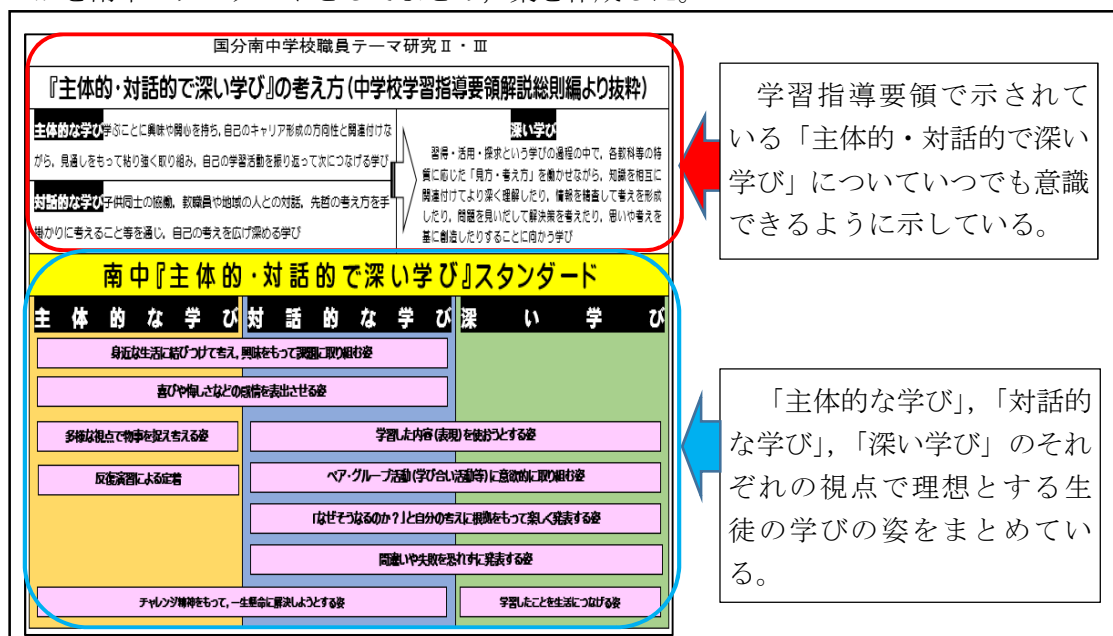


図16 南中「主体的・対話的で深い学び」スタンダードの概要

e 振り返りシートの結果

校内テーマ研究Ⅱの反省を基に組み立てた校内テーマ研究Ⅲは、生徒の学びの姿を見取することを重視した。グループ討議では、検証授業Ⅰの映像から生徒の学びの姿の見取りを行った。その結果、目指す生徒の学びの姿についての意見が言いやすく全教員が「意見が言いやすかった。」という結果（図17）であった。また、「生徒の興味・関心が高まるような学習課題づくりが一番難しいと感じたので、学習課題づくりを研修したい。」という感想があった。さらに、「本校の研究はテスト等の点数にこだわるといふような学力向上の研究でないことに共感もてる。」という意見もあった。

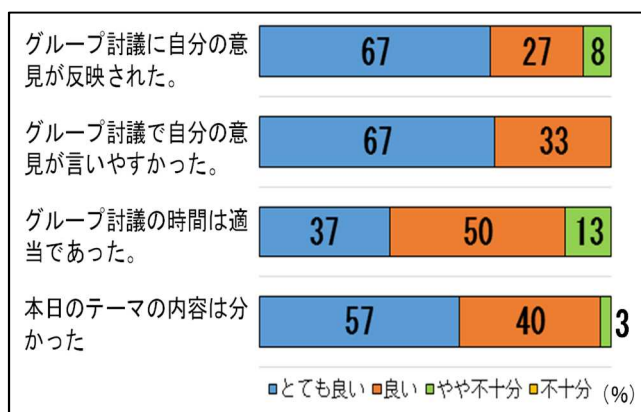


図17 テーマ研究Ⅲの教員用振り返りシートの結果

(ウ) 考察

第一部にて、映像を基に生徒の学びの姿について意見交換が多くできたことにより、教員が自信をもって学びを見取ることができるようになったと感じた。その上で第二部では、各教科で理想とする生徒の学びの姿をまとめ、それらの学びを「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」に分類した。その結果をまとめることで「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を作成した。このスタンダードは、次の検証授業Ⅱで検証を行い、改善していくことにした。

エ 校内テーマ研究Ⅳ

(ア) 授業づくり検討会と校内テーマ研究Ⅳに向けての研修係会

校内テーマ研究Ⅳは、校内テーマ研究Ⅰ～Ⅲで決定した教科等横断的な視点での共通目標と「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の検証を目的として、数学の検証授業Ⅱを基に企画・運営した。また、授業参観から校内テーマ研究まで運営がスムーズに進み、討議が深まるように、これまでと同様に、前日までには事前資料の配布を行った。検証授業Ⅱの指導案については、検証授業Ⅰと同様に授業者だけではなく、授業づくり検討会にて教科と研修部の共同で指導案の作成を行い、模擬授業や事前授業を実施し、授業検討を重ねた。具体的な授業の流れは、地域の素材である県下周駅伝を学習課題に利用し、ペア・グループ活動を取り入れ、自分のグループの考えと他のグループの考えを比較・検討させ、更にグループの考えをまとめる活動を取り入れた。また、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」で示した理想とする生徒の学びの姿が、問題を解決していく過程でたくさん表れるようにＩＣＴやホワイトボードを活用し、思考を深め、表現しやすくなる工夫も行った。



写真9 授業づくり検討会

【校内テーマ研究Ⅳに向けての事前配布資料】

テーマ研究Ⅳの研究討議を行うための資料 H30.11.7

国分南中学校研修係

1 検証授業

(1) 日時・内容

- ・ 時間…11月9日(金)5校時
- ・ 内容…資料の活用(一斉授業・T T形式)

(2) 授業設計について

- ・ 教科等横断的な視点での共通目標の実施の検証
 - ア 授業のスタート1分と終わりの3分の振り返りの時間の確保
 - イ ペア・グループ活動の効果的な活用
 - ウ 授業の終末における家庭学習とのつなぎの実施
- ・ 地域素材の活用
- ・ 「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を取り入れた授業

2 検証授業の参観の視点と方法

(1) 参観の視点

視点①

教科の枠を超えた共通目標事項は、効果的に授業に取り入れられていたか。

視点②

「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」にまとめられている生徒の学びの姿が見られたか。

(2) 参観の方法

「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の中の生徒の学びの姿を見取った場合は、指導案に①～⑩の番号を記入する。また、スタンダードにない生徒の学びの姿を見取れた場合には、付箋に記入して指導案に貼る。

(3) 班編制

1班…英語 2班…国語 3班…数学 4班…保健、養護教諭
5班…理科 6班…社会 7班…音楽、美術、技術・家庭

3 研究討議の内容

- ・ 「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の検証
- ・ 各自の挑戦課題の決定

南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード		
主体的な学び	対話的な学び	深い学び
① 身近な生活に結びつけて考え、興味を持って課題に取り組む姿		
② 喜びや悔しさなどの感情を表出させる姿		
③ 多様な視点で物事を捉え考える姿	⑥ 学習した内容(表現)を使おうとする姿	
④ 反省課題により授業内容の定着が図られた姿	⑦ ペア・グループ活動(学び合い活動等)に意欲的に取り組む姿	
	⑧ 「なぜそうなるのか?」という自分の考えに根拠をもって楽しく発表する姿	
	⑨ 間違いや失敗を恐れずに発表する姿	
⑤ チャレンジ精神を持って、一生懸命に解決しようとする姿		⑩ 学習したことを生活につなげる姿

【検証授業Ⅱ（数学）の学習指導案】

過程	時間	形態	学習活動・内容	指導上の留意点（教師の指導及び支援） ※ 南中スタンダード（生徒の学びの姿）	スタンダード 番号記入
導入	3	一斉	1 既習事項を確認する。 範囲（最大値・最小値）、度数分布表、ヒストグラム、相対度数、平均値、中央値、最頻値	○ 前時に学習した都道府県の人口データを基に、傾向を読み取るために必要な視点を思い出させる。	※ 授業参観時に南中スタンダードの生徒の学びの姿の番号（事前配布資料に掲載）を記入し、共通目標の検証を行う欄
	3	一斉	2 県下一周駅伝を思い出し、本時の学習課題を把握する。 県下一周駅伝の過去20年間の結果を調べたところ、始良チームと〇〇チームは10勝10敗の引き分けでした。そこで、来年度はどちらのチームが勝つかを予想し、理由を説明しなさい。	○ 郷土の素材である県下一周駅伝を課題に利用する。 ※ スタンダード① ○ 判断するための前提を確認する。 ・ 勝敗の予想理由は感情的なものではなく数学的な表現を使うこと。 ・ データを整理して、どちらのチームが速いのか傾向を調べること。	
	2	一斉	3 本時の学習目標を確認する。 どちらのチームが勝つか予想するためにはどうすればよいか。	○ どのようにして調べるか意見を発表させて、見通しをもたせる。	
	3	個別ペア	4 どのように調べるか見通しをもつ。 反応例 ・ 並べかえる。・ 範囲や代表値を求める。		
展開	10	個別グループ	5 学習課題に取り組む。 反応例 ・ 中央値は〇〇チームが速い。 ・ 〇〇チームのベストタイムが離れている。 ・ 〇〇チームの範囲が大きい。 ・ 始良チームの31時間未満の相対度数は0.4で〇〇チームは0.2である。 ・ 近年は、〇〇チームが勝っている。 ・ 〇〇チームは31時間00分以上32分00分未満に分布が集まっている。	○ 学習課題に取り組ませる。 ○ 班長を中心に、グループで調べる内容や役割は話し合いで決めさせる。 ○ 表やグラフを記入する用紙や計算機を各グループに配布し、必要なものを各班で判断して使用させる。 ※ スタンダード③・⑥・⑦・⑤	※ 授業参観時に南中スタンダードの生徒の学びの姿の番号（事前配布資料に掲載）を記入し、共通目標の検証を行う欄
	5	グループ	6 グループで意見交換をし、グループでの結果をまとめる。	○ グループで意見交換をさせ、どちらが来年度勝つのかとその理由をホワイトボードに書かせる。 ※ スタンダード⑧・⑨	
	7	一斉	7 グループの意見を発表する。	○ グループの意見を発表させる。 ※ スタンダード⑨	
	5	グループ	8 発展問題に取り組む。 自分が始良チームの監督だとしたら、勝たせるためにどのようなアドバイスをしますか？ 反応例 ・ 例年始良チームは、31時間30分以上32時間00分未満の結果が55%を占めているので、選考会で31時間30分以上のタイムがでるように練習をしよう。 ・ 〇〇チームの2番目の良いタイムが30時間41分33秒である。そのタイムを上回ることを目標に練習しよう。	○ 発展問題に取り組ませる。 ○ 班で調べたデータの結果やその他の班の発表を基に、始良チームが勝つためのアドバイスを数学的な表現を使って考えさせる。 ※ スタンダード⑤・⑥	
	3	一斉	9 グループの結果を発表する。	○ グループの結果発表を基に、解答の確認を行う。 ※ スタンダード⑩	

終末	6	個 一斉	10 データを整理することのよさについてまとめる。 ○ データを整理することのよさについてノートにまとめさせる。	※ 前ページと同様
	3	個	11 本時の振り返りと本日の家庭学習の内容について書く。 反応例 ・ ヒストグラムをつかって、分布を調べる。 ・ 相対度数を求めて、分布を調べる。 ・ 中央値や範囲を求めて、分布を調べる。 ○ 本時の授業を振り返らせ、家庭学習と授業をつなげる。	

(イ) 校内テーマ研究Ⅳの実際（11月9日（金））

a 校内テーマ研究Ⅳの目標

数学の検証授業を基にした教科等横断的な視点での共通目標と「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の検証と自己課題の設定

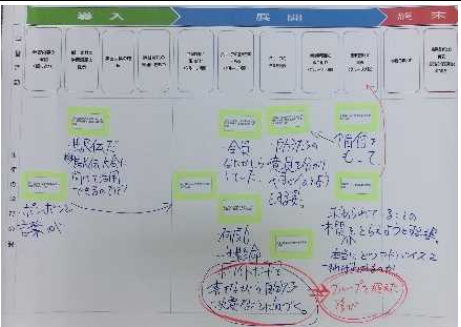
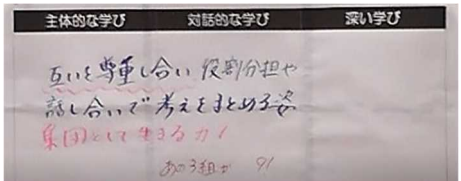
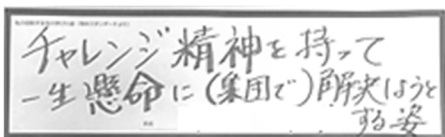
b グループ討議の視点

視点① 教科の枠を超えた共通目標は、効果的に授業に取り入れられていたか。
視点② 「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」にまとめられている生徒の学びの姿が見られたか。

c 校内テーマ研究Ⅳの実際

校内テーマ研究Ⅳは、校内テーマ研究Ⅰで作成した教科等横断的な視点での共通目標である「振り返り」、「ペア・グループ活動」、「家庭学習とのつなぎ」、地域の素材を活用した学習課題と校内テーマ研究Ⅲで作成した「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の中の生徒の学びの姿が見取れることを意識した。実際の数学の検証授業では、指導案のどの学習活動で南中スタンダードの生徒の学びの姿が見られたか、または、授業で取り入れた共通目標が効果的に使われていたかを検証した。また、特に良かった学びの姿や新しく見られた学びの姿を各グループで検討し、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の改良を行った。校内テーマ研究の最後には、明日からの授業において各自の目標とする生徒の学びの姿を短冊に書き、個人の授業改善の方向性を示した。

進め方	具体的な働き掛け
1 講師紹介	
2 これまでの校内研究の成果について	○ 教科等横断的な視点での共通目標と「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」についての説明をする。 ○ 授業を実施する中で最も意識した生徒の学びの姿について説明をする。
3 授業者の説明	○ 本時の授業のねらいを説明する。
4 話合いの内容や進め方、時間配分等についての確認	○ グループ討議の内容は、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の検証であることを伝える。 ○ 検証授業で見取れた南中スタンダードの中の生徒の学びの姿をワークシートに記入し、授業の中に理想とする生徒の学びの姿が表れていたのかを検証する。また、新しい生徒の学びの姿を見取れた場合は、ワークシートに記入する。
5 グループ討議	○ 検証授業の中で特に良かった生徒の「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の姿をまとめ発表する。発表の際は選んだ理由を説明する。

6 グループ発表	○ 各班のファシリテーターは教科主任とする。発表者は、各グループで決める。	 写真 10 グループの拡大指導案  写真 11 発表された学びの姿  写真 12 個人の挑戦課題
7 挑戦課題の考察	○ 明日からの授業で目指す南中スタンダードの生徒の学びの姿を考え、短冊に書く。	
8 挑戦課題の表明	○ 各班にて、明日からの授業改善に向けての挑戦課題を表明する。	
9 まとめ	○ 学びの組織活性化プロジェクト終了後の取組についての説明をする。	

d 南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード（校内テーマ研究Ⅳを基に改良）

グループ討議で発表された特に良かった生徒の学びの姿や新しく見取れた学びの姿を8月に作成した「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」に挿入し、改良したものが図18である。来年度、このスタンダードを基に検証をする予定である。

国分南中学校職員テーマ研究Ⅳ		
『主体的・対話的で深い学び』の考え方(中学校学習指導要領解説総則編より抜粋)		
主体的な学び 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び	対話的な学び 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び	深い学び 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び
南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード（H30.11改良）		
主体的な学び	対話的な学び	深い学び
身近な生活に結びつけて考え、興味をもって課題に取り組む姿		
喜びや悔しさなどの感情を表現する姿		
	互いに尊重し合い生徒同士で議論する姿	
多様な視点で物事を捉え考える姿	学習した内容(表現)を使って解決しようとする姿	
反復演習により授業内容の定着が図られた姿	ペア・グループ活動(学び合い活動等)に意欲的に取り組む姿	
	「なぜそうなのか?」という自分の考えに根拠をもって楽しく発表する姿	
	間違いや失敗を恐れずに発表する姿	
チャレンジ精神をもって、一生懸命に解決しようとする姿		学習したことを生活につなげる姿

図 18 南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード（改）

e 振り返りシートの結果

研究内容に対する理解やグループ討議の時間に関しては、全ての教員が良いという意見であり、グループ討議も活発に行われていたという結果であった。その他の意見として、「生活につなげられるような学習課題づくりや効果的な家庭学習の在り方についてもより一層、研究をしたい。」という意見があった(図19)。

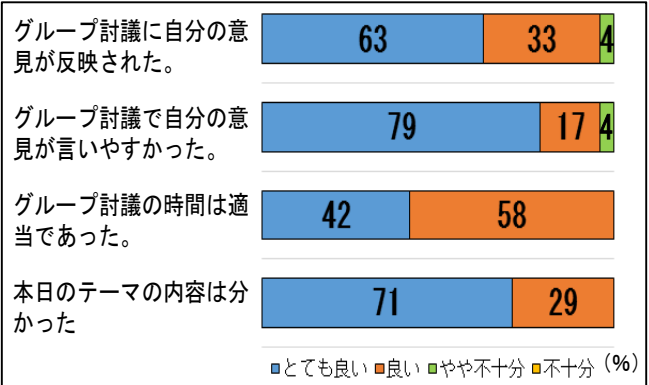


図 19 テーマ研究Ⅳの教員用振り返りシートの結果

(ウ) 考察

検証授業Ⅱは、本年度の校内テーマ研究のまとめと考え、共通目標と地域の素材を活用した学習課題を授業に取り入れ、校内テーマ研究Ⅲで作成した「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の中の生徒の学びの姿が多く見取れるように意識した授業を提案した。地域の素材を活用した学習課題は、生徒のみならず参観する教員の興味・関心を高めることができた。生徒の活動が意欲的に行われたことで様々な生徒の学びの姿が表れていた。同時に、これまでの校内テーマ研究を経て、教員が生徒の学びの姿から授業改善をしようとする意識が高まっているのを感じた。そのため、グループ討議は活発に行われ、今までなかった生徒の新しい学びの姿も導き出され、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の改良ができた。そして最後に、明日からの授業にこれまでの校内テーマ研究の成果が生かされるように、各自の挑戦課題を表明した。今後は、この挑戦課題を実践することが授業改善につながると考える。

オ 相互授業参観

(ア) 実施目的

- ① 参観経験や参観者のコメントを通じて、自己の授業実践を振り返る。
- ② 生徒の学びの姿から「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の検証を行う。
- ③ 学業指導と生徒指導の両面から他の教員との情報共有を図る。

(イ) 相互授業参観の実践

11月に2週間で実施した。原則として、参観時間は50分間とし2科目以上の参観を自由に行うものとした。授業者が指導案を作成する必要はなく、普段の授業の実践の中に共通目標を取り入れること、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の理想とする生徒の姿が見取れる授業を目指すこととした。参観者は、生徒の学びの姿や授業に関する意見や感想等を参観シート(図20・21)に記入し、研修係に提出した。そして、研修係は、提出された参観シートを分析した後に授業者に渡した。

相互授業参観シート		参観者名 ()	
月 日 (曜日)	教科名 (○校時)	学級名	授業者
12月5日(水)	数学(5校時)	2年5組	教諭 一青
単元・題材・主題 南中スタンダード		主体的な学び 対話的な学び 深い学び	
生徒の学びの姿を自由に記入してください。		教師と対話しながら 「証明が何かわずれ...」...	
授業の感想 授業者へのメッセージ		○○ならば△△⇒後段的に教師はいいのかもしれない。 □と○の使いわけも共通化するといいかも。	

図 20 相互参観シート(数学)

相互授業参観シート		参観者名 ()	
月 日 (曜日)	教科名 (○校時)	学級名	授業者
11月20日(金)	社会(3校時)	3年1組	教諭 一青
単元・題材・主題 南中スタンダード		主体的な学び 対話的な学び 深い学び	
生徒の学びの姿を自由に記入してください。		身近な生活(家)から 導入して... ...	
授業の感想 授業者へのメッセージ		丁寧な説明で基礎基本が定着...	

図 21 相互参観シート(社会)

(ウ) 考察

テーマ研究Ⅰ～Ⅳまでを終えて、教科等横断的な視点での共通目標や「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の実現を日常の授業で目指すことが学校全体の授業力の向上につながると考え、今年度初めて導入を試みた。学期末の業務に追われる時期だったこともあり、授業参観をする教員が少なかった。来年度は、今年度の反省を参考に日程・方法等を企画し直す必要があると感じた。

(2) 家庭と連携した取組

ア 学力向上通信「じゃっど・すっど・きばっど」の発行

家庭学習と学校とのつなぎとして、学力向上通信を今年度から発行することにした。教員用の通信と保護者も含めた通信（図23・24）の二種類を作成し、教員用については検証授業の様子や校内テーマ研究での討議内容や決定事項などを掲載し、保護者も含めた通信は学校の研修の様子や授業改善の方針などを掲載した。研修や授業の様子を教員や家庭に知らせることで、学校・家庭が力を合わせて学力向上を目指す環境に近づくことを意図した取組である。

配布後に教員から「討議での決定事項が確認できてありがたい。」「いい写真が入っていましたね。」などの感想があった。また、保護者に家庭配布用の学力向上通信についてのアンケートを実施した（図22）。その結果、「先生方の取組がよく分かり、どんな授業なのか見たいと思った。」「通信を読むことで南中の取組が分かるのでよい。」「写真付きで分かりやすい。」などの感想から、学力向上通信が学校と家庭をつなぐために効果があることを実感した。その他に、意見としては「授業参観日などでもどのような取組なのかを紹介してほしい。」「印刷をカラーでしてほしい。」などがあった。内容や掲載方法をより工夫する必要があることが明らかになった。

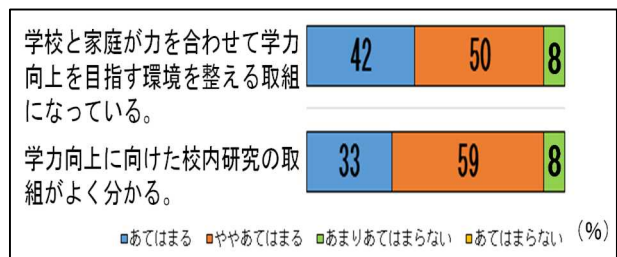


図22 保護者向けの学力向上通信についてのアンケート結果



図23 家庭配布用の学力向上通信



図24 教員配布用の学力向上通信

イ 授業と家庭学習とのつながり

本校では、生徒が主体的に家庭学習に取り組むようにするために、その日に学習したこと、予習や自分が学習したいことを家庭学習の内容としてノートに書かせている。現状では、家庭学習については、計画的に授業の内容と連動した実践までには至っていないケースが多く見られる。この課題を解決するために、教科等横断的な視点での共通目標の一つである授業の振り返りの時間設定の中に家庭学習と授業をつなぐ工夫を行った。その結果、授業の最後に家庭で勉強したいことをノートに記入させることで家庭学習に目標をもって取り組ませることにした。教員からは「家庭学習の内容が充実してきた。」、生徒からは「その日の家庭学習を計画的に進められるようになった。」などの意見があった。実際に、授業と家庭学習を関連付けられたものが写真13のとおりである。

【授業の振り返りの時間に生徒が決めた家庭学習の内容】

おとめ
どこのチームが勝つか予想するためには、最小値、最大値、平均値を知ることが必要。
代表値をうまく使うことが大切。
平均値を求めるのは難しい。
宅習。よりなかりやすい方法。

【授業が実施された日の家庭学習】

家庭学習の内容が充実してきた。
その日の家庭学習を計画的に進められるようになった。
実際に、授業と家庭学習を関連付けられたものが写真13のとおりである。

写真 13 授業と家庭学習とのつながり

ウ テスト訂正の保護者コメント

家庭学習に対する保護者と生徒とのつながりとして、テスト訂正へ保護者がコメントを記入すること（写真14）を実施した。本校では、定期テスト後の訂正帳の指導に重点を置いているが、学校内の取組で終わっている状況がある。そのため、保護者が直接、テストで間違った内容を把握したり、つまづいている問題を親子で語り合ったりすることが少なくなり、保護者が成績表を見て、順位や偏差値だけで学力の定着度合いを判断してしまう。保護者がテスト訂正のコメントを書くことで、保護者なりのアドバイスをしたり、親子で間違いを確認し合ったり、勇気付けたりするコメントが見られるようになってきた。

<保護者から一言>

今回、まちがった所だけでなく、あっている所も見て、実力を伸ばすつもりで欲しいです。次は、満足というようにがんばりましょう。

<保護者から一言>

予想以上の点数にとてもおめでとうございます。苦戦に言いにくいもの、やれば出来るという気持ちで、これからもしっかりと頑張ってください。

<保護者から一言>

方程式の多項式（計算すること）の理解がまだ曖昧な印象ですが、中間テストで理解できていないところは、解答と書き合ってください。ケアレスミスが減るといいと思います。

写真 14 テスト訂正の保護者コメント

(3) 地域と連携した取組

ア OBG（卒業生）講話の実施

地域の素材の活用として、3年生に向けてのOBG（卒業生）講話を実施している。例年、高校生活についての話や中学校の思い出についての講話が多かったが、今回は、学力向上へつなぐために、高校の学習や生活についてだけでなく、中学校生活での学習面などの留意点も話してもらった。講話後の振り返りでは、生活面や進路選択の話よりも学習面の話に興味があったと答えていた（図25）。また、振り返りシートでは、学ぶことの大切さについての感想が多かった（写真15）。

今までのOBG（卒業生）講話は、将来の夢や進路選択についての内容であったが、中学校時代に学ぶ意義や大切さを意図的に講話の内容に加えてもらうことで生徒の学習面に対する意識も高めることができた。

生徒が興味を持って聞いた講話の内容（%）

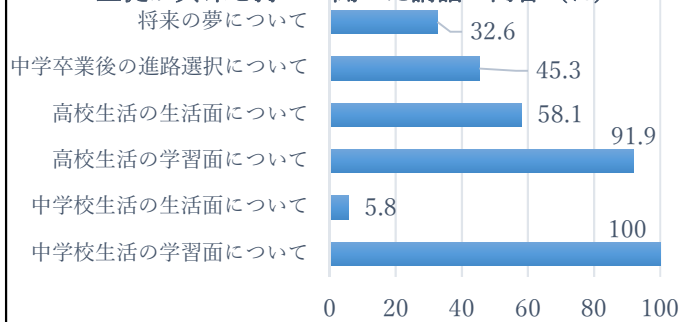


図 25 OBG講話（卒業生）の生徒の振り返りシートの分析

私は高校について少し考えている講演だったなと思いました。私も少し考えたことをな かっただけ、考えてみると、分かってきました。 如治木工業、如治木高校、国分中央の話も聞いて、それぞれの生活が凄うん だなと思いました。学習時間、夏期講習から、それぞれの学校で言うことも 知りました。でも、私の家には、どの高校も分からないと思うから、今日聞いた 厚物の解き方を参考にし、頑張りたいです。 女子でも、工業系に行く人もいるんだなと思いました。今日の講話の、話し は分かりやすかったです。 頑張るか！	正直なところ、「行きたい高校(如治木)だけ 聞いていればいいか」などと失礼なことを考えて いたけど、他の2校の先輩たちの話も、ば り参考になり、きちんと聞いてよかったと思 った。一番聞いていて面白かったのは、や はり興味のある如治木高校の話だった。が 同時に少し不安にもなった。だが、先輩方 たちが経緯した受験前の不安にならないよう 対策をきちんとして、この不安をはらおうと思う
--	--

写真 15 OBG（卒業生）講話の生徒の感想

イ 授業での地域の素材の活用

地域とつなぐ取組として、各教科の学習内容に地域の素材を積極的に活用してもらうようにした。本校は、総合的な学習の時間などの体験学習で地域の素材を有効に活用した取組は行っているが、教科等とつながっていない状況である。本研究では、学んだことが教科内だけではなく、地域やその他の多くの事象に活用できてこそ学力向上につながると捉えている。そのためにも、教科の枠を超えて、できるだけ多くの場面で地域の素材を活用していくことが大切である。

検証授業Ⅰでは、学級活動と英語の授業を関連付けて霧島市特有の職業を取り扱った。また、数学科の検証授業Ⅱでは、本校が中継地点である県下一周駅伝についての題材を取り扱った。

(7) 第2学年学級活動「霧島市特有の職業を調べよう」、英語「スピーチ文を書こう」

本校の地域には、黒酢、埋蔵文化財に関する仕事、自衛官など、特色のある職業がある。中学校第2学年では、霧島市の特色ある職業に関する興味をもつだけでなく、自分の進路の適性を見付けるために、職業についてどのような資質・能力が必要になってくるのかを調べるのが大切である。学級活動では、以下の学習課題を設定し、インターネットや資料等を通して調べさせた。

【学級活動の学習課題】

霧島市には様々な霧島市特有の職業がある。この職業に就くためにはどのような力が必要でしょうか。調べて紹介しよう。

黒酢職人・縄文土器発掘調査委員・自衛官・霧島九面太鼓・カーデザイナー・ホテルスタッフ・精密機械製造スタッフ・茶生産者・空港の管制官

学級活動の授業から、これらの職業について調べたことで、次の英語の時間では、以下のような学習課題を取り扱った。

【英語の学習課題】

相手に分かりやすく伝えるスピーチ原稿を書くには、どのような工夫が必要だろうか。

黒酢職人・縄文土器発掘調査委員・自衛官・霧島九面太鼓・カーデザイナー・ホテルスタッフ・精密機械製造スタッフ・茶生産者・空港の管制官

モデル文をこれまで学習した語句や文法を工夫して使い、読み手に分かりやすいスピーチ原稿を書くことを学習した。

授業後の振り返りには、「霧島市に様々な職業がたくさんあることを知って、驚いた。」とか「霧島市はすごいところだ。」など、郷土の素晴らしさに感動している生徒が多かった。また、学級活動で職業を調べる時間が少なかったので、「家でも職業について調べてみようと思う。」という感想もあった。学級活動と英語の授業で同じ地域の素材を取り扱うことにより、生徒たちは、学級活動でまとめた文章に分かりやすくするために接続詞を使ったり、英語で表現したりするなど意欲的に取り組んだ。

(イ) 第1学年数学科「資料の活用」

【数学の学習課題】

本校は、県下一周駅伝の中継地点となっており、毎年、全校で応援をしている。テレビで放送された本校の生徒が、選手を応援している過去の映像を見せると驚いた様子の声が聞こえた。とても身近な題材なので関心をもって取り組む生徒が多く見られた。

県下一周駅伝の過去20年間の結果を調べたところ、始良チームと〇〇チームは10勝10敗の引き分けでした。そこで、来年度はどちらのチームが勝つかを予想し、理由を説明しなさい。

始良チーム		〇〇チーム	
開催年度	タイム	開催年度	タイム
H8	30時間29分01秒	H8	31時間01分08秒
H9	30時間27分51秒	H9	30時間20分39秒
H10	30時間37分12秒	H10	31時間30分51秒
H11	30時間39分37秒	H11	30時間41分33秒
H12	30時間55分19秒	H12	30時間42分29秒
H13	30時間27分46秒	H13	31時間54分22秒
H14	30時間29分23秒	H14	31時間04分27秒
H15	30時間40分48秒	H15	31時間09分49秒
H16	31時間51分44秒	H16	30時間44分16秒
H18	31時間37分25秒	H18	31時間39分47秒
H19	31時間48分37秒	H19	31時間03分38秒
H20	31時間45分50秒	H20	31時間58分52秒
H21	31時間17分58秒	H21	31時間27分48秒
H22	31時間38分18秒	H22	31時間10分56秒
H23	31時間37分34秒	H23	31時間41分23秒
H24	31時間43分34秒	H24	31時間00分05秒
H25	31時間32分45秒	H25	32時間13分43秒
H26	31時間58分29秒	H26	31時間28分04秒
H27	31時間53分49秒	H27	31時間11分17秒
H28	31時間48分35秒	H28	31時間39分49秒

授業後の生徒のノートの振り返りには、本時のまとめの内容とは別に「平均値で比べるのは難しい。」や「代表値をどんなときに、どのように使うのかを判断し、代表値をうまくつかう。」と書かれていた(写真16)。授業のねらいである代表値の理解を深めるために地域の素材を題材として活用することは有効であることが分かった。

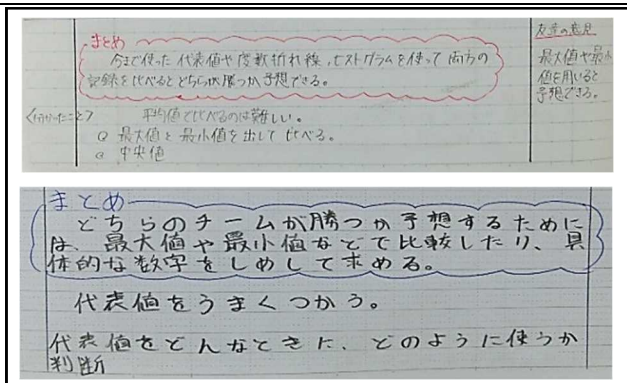


写真16 数学ノートの振り返り

IV 研究のまとめ

1 研修係の取組のまとめ

下の表は、4月から11月までに私が研修係の一員として取り組んだことをまとめたものである。

R-PDCAサイクルで校内テーマ研究を4回実施し、南中「主体的・対話的で深い学び」スタンダードを完成させた。

月	学校内での取組		家庭・地域と連携した取組
	テーマ研究	研修係会・授業づくり検討会	
4月		・ 研究係会（目的・内容の確認）	
5月	テーマ研究Ⅰ	・ 全教員への校内研究の目的・内容の説明（テーマ研究Ⅰに向けてのアンケート実施） ・ 研修係会（テーマ研究Ⅰの準備と打合せ）	・ 保護者への学力向上に向けての取組の説明（学年PTA・PTA総会）
6月		・ テーマ研究Ⅰの振り返りシートの分析 ・ 研修部会（検証授業Ⅰとテーマ研究Ⅱの内容の検討） ・ 指導案づくり検討会（英語の指導案検討・模擬授業の実施）	・ 学力向上通信の発行

7 月	検証授業Ⅰ テーマ研究Ⅱ	・ テーマ研究Ⅱの振り返りシートの分析 ・ 研修係会 (テーマ研究Ⅲの内容の検討・打合せ)	・ 学級活動と英語で連携した地域の素材を利用した授業の実施 ・ 学力向上通信の発行 ・ O B G (卒業生) 講話の実施
8 月	テーマ研究Ⅲ	・ 研修係会 (南中スタンダードの完成) ・ テーマ研究Ⅲの振り返りシートの分析	・ O B G (卒業生) 講話の生徒用振り返りシートの分析 ・ 学力向上通信の発行
9 月			・ 学力向上通信に関するアンケートの実施 (P T A 総務部会)
10 月		・ 研修係会 (テーマ研究Ⅳの内容の検討) ・ 授業づくり検討会 (数学の指導案づくり)	
11 月	検証授業Ⅱ テーマ研究Ⅳ	・ 授業づくり検討会 (数学の模擬授業・事前授業の実施) ・ 研修係会 (テーマ研究Ⅳの準備と打合せ) ・ テーマ研究Ⅳの振り返りシートの分析	・ 学力向上通信の発行 ・ 数学で地域の素材を利用した授業の実施

2 研究の成果

(1) 学校内での取組の結果

5 月と11月に実施した実態調査 (教員対象) の結果を比較した。「学力向上に対する学校の課題を教員間で共有できている」という回答は88%に達し、特に大きな変容が見られた (図26)。また、「本校は、教科の枠を超えた学力向上に対する共通な目標をもって研究を進めている」という回答も同様に88%に達していた (図27)。ほとんどの教員が学力向上に対する本校の課題を把握した上で、共通の目標をもって研究を進められるようになったことがうかがえる。

「指導案づくりを共同で検討している」と回答した教員は、5月の時点でわずか9%であったが11月には44%となっていた (p. 26 図28)。また、「お互いの授業を自由に参観し意見交換ができてい」という回答は、5月に比べて25ポイント増加していた (p. 26 図29)。指導案を共同で検討したことや相互授業参観を実施したことにより、授業についてお互いに意見を言いやすい雰囲気が生み出されたと評価できる。

テーマ研究Ⅰで設定した共通目標の一つであるペア・グループ活動に関しては、11月の結果は全ての教員が「私は、ペア・グループ活動の場面に授業に効果的に取り入れることができている」と回答している (p. 26 図30)。これは、全ての教員が何らかの授業でペア・グループ活動を利用できるようになったと読み取れる。

以上のことから、学校内での取組の成果として以下の三つを挙げることができる。第一に、校内

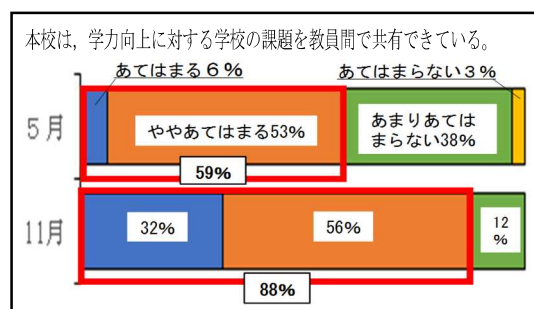


図 26 教員の実態調査の比較 (課題の共有化)

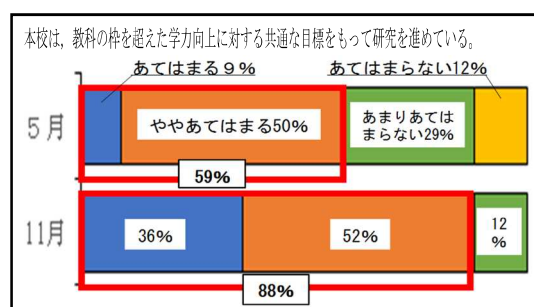


図 27 教員の実態調査の比較 (共通目標)

テーマ研究Ⅰを実施したことで、教員が学力向上に対する本校の課題を把握し、共通の目標をもって研究を進められるようになった。第二に、指導案づくり検討会や教科部会を中心に指導案づくりや模擬授業等が共同で行われるようになったことで、日頃の授業においてもお互いの授業を参観して勉強する教員の姿や、日常的に授業づくりや生徒の学びの姿について意見交換をする教員の姿が見られるようになった。第三に、ペア・グループ活動を利用した検証授業を実施したことは、ペア・グループ活動を取り入れた授業の参考例となり、自分の授業においてペア・グループ活動を取り入れようとする教員が増えてきた。

(2) 家庭・地域と連携した取組の結果

家庭と連携した取組として、授業の振り返りの場面において家庭学習の内容を決めさせることができたときは、(p. 22 写真 13) のように家庭学習の内容が充実することが分かった。また、学力向上通信については p. 21 の図 22 のように全家庭に配布することで、保護者が先生方の取組や学校の学力向上に向けた取組に関心を示すようになることが分かった。

地域と連携した取組について「OBG (卒業生) 講話は、生徒の学力向上に役立っている」と回答した教員は、5月に比べ25ポイントの増加であった(図31)。このことは、講話する卒業生に対し、在校生が目的をもって学習に取り組めるような講話内容を依頼したことで、在校生の不安や疑問が解消され、生徒に学ぶことの意義や目的を認識させる取組となったからである。OBG講話も内容を工夫することで生徒の学力向上への意識を高められることが分かった。

3 今後の課題

授業づくりについて、指導案づくりを共同で行ったり、お互いの授業を自由に参観したりすることで、意見交換しやすい雰囲気が生み出されたことは大いに評価ができるが、意見交換ができていないと回答した教員の割合は、まだ半数程度である (p. 25 図 28, 図 29)。今後もお互いの授業を自由に参観し意見交換できる雰囲気を広げ、より多くの教員を包括するものとなるように取り組んでいく必要がある。

家庭学習については、「家庭学習点検が学力向上に役立っている」という回答は、5月と11月の差がない(図32)。家庭学習点検が学力向上を目指す取組の

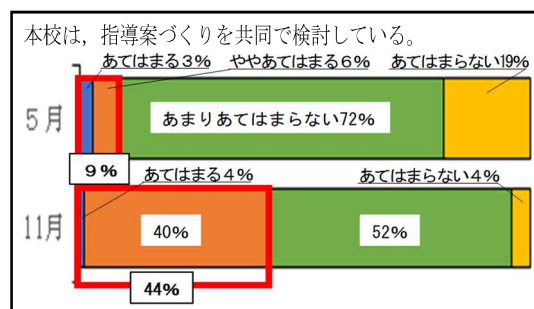


図 28 教員の実態調査の比較 (指導案づくり)

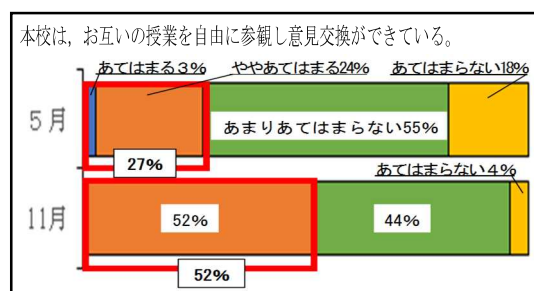


図 29 教員の実態調査の比較 (相互授業参観)

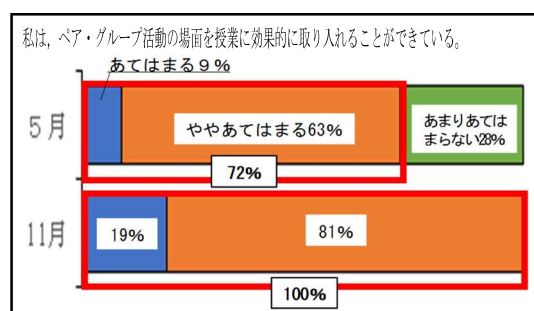


図 30 教員の実態調査の比較 (ペア・グループ活動)

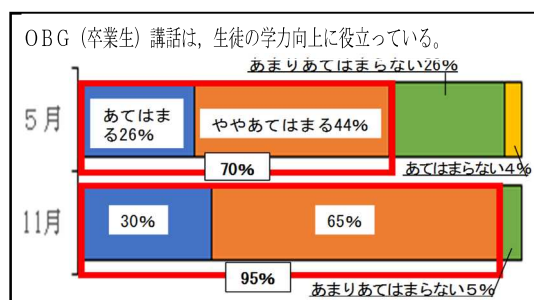


図 31 教員の実態調査の比較 (OBG (卒業生) 講話)

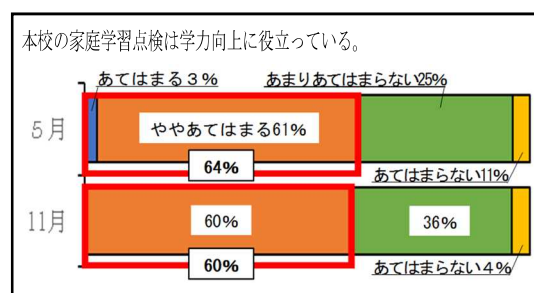


図 32 教員の実態調査の比較 (家庭学習点検)

一つとなるように、活用方法を検討する必要がある。

家庭との連携については、「生活の記録に授業と家庭をつなぐ役割を持たせて活用している」という回答は、5月より11月の方が低い結果であった（図33）。校内テーマ研究にて家庭学習と授業とをつなぐ工夫について討議を行い、全教科で共通して取り組める方法を検討する必要がある。

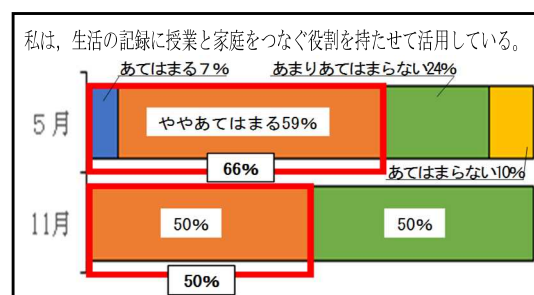


図 33 教員の実態調査の比較（家庭学習）

4 総括

学校・家庭・地域が力を合わせて学力向上を目指すことで、生徒自身が予測困難な未来を切り拓くことができると考え研究を進めてきた。とはいえ、何ができれば学力が身に付いたと言えるのか、学力とは測れるものなのか、という疑問の答えは未だ見つからない。しかし、本研究を通して得られた最も素晴らしい成果は、生徒の学力向上に向けて教員が同じ方向を向いて歩み出したことである。校内テーマ研究を積み上げていく中で「主体的・対話的で深い学び」の実現を目標に、真剣に討議を重ね、授業力の向上や生徒の学力向上を目指し授業改善に取り組み始めた。その結果、昨年まで多数挙げられてきた「アクティブ・ラーニングって何ですか。」という質問がなくなり、「本校の研究テーマに取り組んでいくことが重要だ。」という研究に前向きな声が聞こえるようになった。「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を完成させたことで、本校なりの理想とする生徒の学びの姿が明確になり、個々の目指す生徒の学びの姿を認識できたからであろう。この研究のゴールはきっと生徒の学びの姿の実現にある。今後もこの研究に邁進したい。

〈参考文献〉

- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説総則編』 平成29年 7 月
- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説英語編』 平成 29 年 7 月
- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説数学編』 平成 29 年 7 月
- 鹿児島県教育委員会
『鹿児島県教育振興基本計画』 平成 26 年 2 月
- 福岡県教育センター編
『校内研修のすすめ方』 平成25年 ぎょうせい
- 高木展男 『変わる学力，変える授業。21 世紀を生き抜くとは』
平成27年 三省堂
- 嶋野道弘 『学びの哲学「学び合い」が実現する究極の授業』 平成30年 東洋館出版社
- 村川雅弘 『ワークショップ型教員研修 はじめの一步』 平成28年 教育開発研究所
- 堀公俊・加留部貴行
『教育研修ファシリテーター』 平成 22 年
日本経済新聞社出版
- 奈須正裕編集 『第 1 巻 子どもに確かな学力を育てる楽しくて力のつく授業づくり』
平成16年 教育開発研究所
- 田中統治編集 『第 1 巻 確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント』
平成17年 教育開発研究所
- 佐藤晴雄編集 『第 3 巻 学校・家庭・地域がともに進める学力づくり』
平成17年 教育開発研究所
- 西川順 『学び合いで始めるカリキュラム・マネジメント 学力向上編』
平成29年 東洋館出版社
- 手島利夫 『学校発・E S D の学び』 平成29年 教育出版

長期研修者 [前畑 あさよ]

担当所員 [溜 清弘]

【研究の概要】

本研究は、次代を担う生徒たちに、これからの社会に対応できる確かな学力を身に付けさせるために、学校・家庭・地域が力を合わせて学力向上を目指すことを研究したものである。

この研究を進めるために重要なことは、学力向上を目指す組織づくりであり、本校は研修係を中心に研究を進めた。最初のテーマ研究では、本校の課題の共有化を図り教科等横断的な視点での共通目標の設定を行った。そして、「共通目標」の検証と「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善についてのテーマ研究を3回積み上げ、「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」を完成させた。また、家庭学習と学校とをつなぐための取組や地域の素材を活用した授業を実施し、家庭・地域と学校をつなぐ取組を行った。

この研究の取組は、生徒一人一人の学びの姿に視点を当てることから始めた。そして得られた成果は、本校なりの理想とする生徒の学びの姿を描き、教科の枠を超えて、生徒の学力向上を目指して教員が同じ方向を向き歩み出したことである。今後も、この研究に邁進したい。

【担当所員の所見】

本研究は、本年度より長期研修の研究領域で新設された「学力向上」に焦点を当て、学校内の取組だけでなく、家庭そして地域との連携まで意識して追究したものである。

本研究の特色は、長期研修を進めながら、学校の校内研究を企画・運営する研修係として校務分掌に位置付けてもらい、学力向上に向けた校内研究の在り方や家庭、地域と学校をつなぐ取組の在り方を明確にしたところにある。

具体的には、全職員で学力向上に向けての共通実践事項である「共通目標」の設定や生徒の学びの姿から授業改善につなげる指標としての「南中『主体的・対話的で深い学び』スタンダード」の作成、地域の素材の積極的な活用、学力向上通信の発行など多くの実践を行った。これらの実践は、個人で行った実践でなく、研修係会や校内研究を通して多くの職員と一緒に取り組めたことが何よりも大きな成果と考える。

「学力向上」は、その場限りの力ではなく、自分を支える力やこれからの社会を創造していく力としてしっかりと身に付けさせる必要がある。本研究を生かして、今後、更に学校での同僚性を高め、教科の枠を超えた連携を継続し、一人一人の学力向上につながっていくことを期待する。